

第一節 作戰當初に於ては在緬英米軍

軍の概況

昭和十七年

一月下旬集團（後ニ飛行師団トナル）が比島に作
 戦一段落後台湾基地より英小國へ転進す
 後ニ於ては在緬甸英米空軍ハ英空軍一
 ヲ主カトシ「三カ月」及「一カ月」ヲ根
 據トシ一擧英空軍（多即士撤遣セル米空軍力
 飛行隊）ヲ「一カ月」ニ配置シ其の協攻敵約
 白毛板船ニシテ昭和十七年十一月大東亞戰
 争勃發後以來英米方面ニ作戰セル第三飛行
 集團ノ「一カ月」ニ空襲攻撃等ニ係リ軍事制也
 此の關係力比較的積極性ヲ欠キ主ト
 シテ「一カ月」及所在飛行場ノ防衛ニ專ル
 シ時トシ泰緬國境附近ニ出現スルニ當リ

前シテ者初ニ於ケル出現極種ハ英ニ於テリ

及「ロウキート」ト云フ

ホリハリケル(銃斗機)「フーリンハイ」(爆撃機)米

其性能爆撃機ニ於テハ大差ナキ

ニ於テハ「P40」(「トマホーク」ト稱ス)ニシテ銃斗機ニ於

テハ取カ九七機(手機)

テハ取カ九七機(手機)運賃性能優劣ニシテ銃斗上

種ハ困難ヲ成ルセシメラレタリ

右ノ如ク比較的偵察機ヲ採リ又ハ在編英

半空軍ハ取カ地上軍ノ「ラングトン」及「ロウキート」

ノ決定全攻田畠ト其ノ時々裡ニ準備機ヲ「P40」

トシ「P40」ニ主カク任事結シ及專ノ機ヲ他種ヒアリ

「P40」ニシテ

「P40」ノ子ノ「P40」自前國ノ全カク運手ヲ「P40」進攻

「P40」

你機ニ一継打機上機機セラレ機カニ一部ヲ

以テ英空軍ハ「P40」カハ英空軍ハ「P40」カハ

面ニ敗走スルニシテ

第二節 緬甸撤退後ニ於ケル英半官軍

一 概況

昭和十七年三月半、^{（イ）}英半官軍ニ於テ西境域セリ

是英半官軍ニ爾後印度方面ヨリ之補給

ニ依リ逐次其ノ勢力恢復シ同年八月頃ニ於

テハ依然英ヲ主トシ總數百七十枚程度

ナリニテ昭和十八年初頭以來兵力逐次増加

ノ一途ヲ出シ特ニ半官軍ノ増強速度

極メテ迅速ニテ昭和十七年半約二百枚同

十八年春四百枚同年秋七百枚昭和十

九年春千枚同年夏千五百枚ノ程度ニ

増加シ^{（度及部）}印度ニ於ケル敵艦ノ勢力カハ英ヨリ米

ハト甚後^{（一）}也^{（二）}英半官軍ノ補助的存在ナルニ

要ス

即チ作戦爲初ニ於ケル積極的戦法ニ其力



一 増強に隨ひ且屢次作戦に経験に基き

此に積極性^{ヲ增加}を移す^{迅速ニ}特^ニ当初^ノ積極性^ヲ

斗^ハ戦^ハス^レト^スア^リヤ^ハハ^リカ^ハハ^リシ^コリ

P38 続^ハイ^テ昭和十八年夏以來附^ノ遂^ニ指^ス

其^ノ戦^場協^同作^戦能^ク又^ハ機^要戦^場

B26 一^ノ現^出 昭和十八年夏よりB29現出ト其^ノニ

縮^小内^地要^地タル^ヲニ^シテ^ハ初^メト^シ

主^トシ^テ交通^要点^ノ遮^断航^空戦^場

ヲ^制始^シ 京^中補^給線^を遮^断主^作戦^ヲ

又^昭和^十七^年夏^季 其^日ノ^至十^八日^ニ於^テハ^ハ大^々攻^撃ヲ^行ハ^シリ^シ也^也

即^チ 戦^場戦^力ニ^於テ^ハ戦^力ノ^優劣^ヲ利^シシ^キ力

力^也 彼^我三^對一^ニ 幸^シク^テ制^圧ノ^優位^ヲ

確保^スル^ニ 右^ノ比率^ヲ破^ルニ^至リ^テ苦^戦矣^也

ヲ^是レ^ガ形^勢力^ニ至^リ

十八年夏季間 於テハ 京中 及ニ 交通ノ 系ヲ 優メサシムルニ

昭和十七年十月西軍明令以降英連立軍一積
極進歩立憲スル中緬甸内軍部被殺數甚一

如左

昭和十七年十月	三〇〇隊
十一月	六〇〇隊
十二月	千二百隊
昭和十八年一月	千九百隊
二月	二千餘隊

~~青~~

緬甸攻果対象トナリ先高台軍ハ在是

取及雲南取勝近 在印カシタ以北以年所

在ノ息カシタ南東及西部印度不在ノ息カシタ

疎密不能ノ關係上後続兵力トシテ大ナル價值

ヲ有シタリト雖モ直接敗テ同存ナカリキ

緬甸撤退当初ニ於テハ英軍空軍由ニ於テハ聯

軍力ハ十カリニ如キモ十八年中盤以降 常陸

4

三島陸軍
數他

上陸軍ヲ生シ同軍ヲヨリハ一体的空軍トナリ
機體ノ改良ト共ニ春、佛印方面へ積極的行
動ヲ見ルニ至リ

尚敵英米空軍ノ特種トシテ空軍ノ保ル事
取テノ如シ

其空軍 我が攻專ニ於テ對應性ヨリテ純空

ニシテ機體ヲ短時日ニ改良スル時ハ却テ

敵ニ集ムラシムトアリ

半空軍 其空軍ニ及シ對應処置程々

迅速ニシテ攻專ヲ受テハ即日対

應手段ヲ講ス

第三節 敵飛行場ノ状況

師團ノ作戦開始当初ニ於テハ敵飛行場ノ其ノ數ニ於テ又其ノ重要質ニ於テ見ルハオモノトク從來ノ平時

非航空使用シテアリシノタカオモシクモ山岳ニハクモ多クシテ附近々

(参考年月)

(補修ヲ加ヘ)

トシテ其ノ飛行場ニ其ノ平ノ年ヲオモシクシテ其ノ程度ニ過キナリ

シテ返次取カ航空攻撃ノ劇烈トナルニ伴ヒ

作戦的ノ大段

此中ノ諸要素ニ修正ヲ加ヘ共ニ秘密飛行場ノ

活用等ノ戦術的施設ヲ加ヘ来レリ

昭和十七年及在臨英米空軍ノ西南支那及

東部印度方面へ撤退後昭和十八年春自航

空襲力カノ多量増強ニ至ル由ニ於テハ東部

印度方面ニ於テハ「カルクタラ」後方根據トシ

「カワカ」「アロシ」「クエン」「チタニ」「シニヤ」

(西陣)

ヲ第一線飛行場トシ在支方面ニ於テハ「高野」

5



其ノ数約三十一ト過ラス

ヲ主トシテ使用シ其ノ要領三三三トシテ其田能心依

（飛行場）

組組板式ニ掩体ヲ附シ逐次築造テ路ノ敷設

（飛行場能力）

達ヲ見シ程方ナリニモ飛行能力ノ一大要素

タニニ糧ヲタシ敵ハ機動力ト利用スルハキ多ク人

（強）

（特ニ東南部地方ニ於テ）

カトシテ逐次増大シ様相ヲ呈シ昭和十八年

秋ニ至リ一隊ニ百三十一以上トシテ

其ノ要領三三三トシテ所謂航空基地田舎

ニ其中心ニ從來ノ増進地ニ主体ノ觀念ヲ

脱却シ附属地区タシ築造テ路ヲ一貫トシ

飛行機ノ分散遮蔽施設ニ付一帯ニ近テ

ニ乃至三ノ飛行場ノ觀念ヲ也各飛行場ハ

夫々築造シ路ヲ各々重疊セシメシ程度ニ至

レリ

（東南部地方ニ於テ）

西南支那方面ニ於テハ其ノ数ニ大差ナシ

緬甸方面作戦ニ際シテ及ボシタルハ日英明降所

飛官某地及雪チ引取航ニ其地ニ過カズ

又昭和十一年初夏以降航ニ其力ノ増田加茲ニ印

支那路ノ増加等ニ伴ヒ「カルカッタ」ニテニキヤ

一曰比明ヲ通ルハ航ニ其ノ因取ト共ニ輸送機

具ニ用ニ中経其地ヲテニキヤニ設ケ作戦用

其地トシテ亦我カ航空力圖ラキ意ニ因據

ニ近ク其年秋用第一線ノ揚ヲ設置シ防禦要

際此接の後方ニ配置スルハ能ハシ力ニ移リ

ハ機動性ヲ利用スルハ中経式ニ取リ換ヘ

用ヲ得ルベシニ至リ

第四師地上軍檢校

緬甸作戦ニ於テハ敵地上軍ニ英印軍及英印軍

(昭和十七年初頭)

(部隊ノ番号等)

ニシテ師団ノ作戦当初ニ於テハ比叡敵軍百十

第十五軍ノ作戦比叡ノ初期ノ如ク進捗也

モ「シ」ニ「向」テ進歩也降「上」シ「方」ニ於テ

比支那軍ノ抵抗ハ英印軍ニ比シテ稍「見」

ハ中「一」アリ「タ」リ「而」テ比叡ノ初期ニ至リ

緬甸内ニ於テハ抵抗ヲ試シ得ズ「敵」軍

ノ作戦指導ナリ地上作戦モ協「同」ニ依

シテ進「場」ノ既「定」第一「師」ニ近「接」シ「テ」

比支「向」テ昭和十七年「末」頃「内」ニ

定「機」也「之」支那軍ニ西「部」又「印」部「に」

入「英」印軍ニ「印」緬甸「境」界「入」固「著」シ

半「歳」ニ「進」歩「シ」

7

トシヨモシカニ備ハル兵軍ノ及專ニ俾レシ當方備ニ於

テモ遂次及專能心熱クヲ進テ備シ年未ニ

於テ^{至リ}在百夢英軍印夢^{部除}會^{部除}約百ノ

友印軍雷司令軍^{部除}約十方ヲ以テ是視取ク又

ルノ狀見ヲ示シテ是及ニ於テハ^{部除}海軍方面

ヨリ先少^{部除}ノアキカニニ外ニ及專ニ於テ引續キ

トシヨモシカニ備ハル兵軍ノ及專ニ俾レシ當方備ニ於

テモ遂次及專能心熱クヲ進テ備シ年未ニ

於テ^{至リ}在百夢英軍印夢^{部除}會^{部除}約百ノ